

なぜ大阪にホームレスが多いのか

大分大学大学院福祉社会科学部研究科
専任講師

垣田 裕介



かきた ゆうすけ 1976年大阪府生まれ
同志社大学文学部卒業。大阪府立大学大学院社会福祉学研究科博士後期課程単位取得。04年4月から大分大学大学院福祉社会科学部研究科専任講師。専攻は福祉政策論、貧困問題。主な著書に「欧米のホームレス問題（下）」（共著、法律文化社、2004年）、「21世紀の医療政策づくり」（共著、本の泉社、2003年）、「21世紀の医療・介護労働」（共著、本の泉社、2000年）などがある。
E-mail: kakita@cc.oita-u.ac.jp
<http://www.h3.dion.ne.jp/~kakita/index.htm>

はじめに

表題に示したように、「なぜ大阪にホームレスが多いのか」というのが、私に与えられたテーマです。本稿では、私がこれまで主に大阪で携わってきたホームレス調査を通して知り得た事実を基にしながら、このテーマに接近してみようと思います。

本題に入る前に、「ホームレス」という言葉遣いについて断っておきたいと思います。

日本で「ホームレス」というと、テントや公園、駅などで見かける「野宿生活者」を指して使われます。しかし、たとえば欧米では「ホームレス」というのは安定した居住環境にない状態を指して用いられており、「野宿生活者」よりも広い意味をもっています。概念の範囲が異なると、問題把握や政策論議の方法も違ってきますので、私も普段は「ホームレス」と「野宿生活者」を使い分けています。しかしながら、ここでは本特集での用語統一を図る意味でも、日本で「野宿生活者」を表す政策用語として定着しつつある「ホームレス」という言葉を用いることにします。

さて、「なぜ大阪にホームレスが多いのか」といっても、これはストレートに答を引き出すのが

難しい問題です。ここではいくつかの視点から考えてみることにします。まず、①大阪の雇用・失業情勢やホームレスに至る経緯などに着目することによって、大阪のホームレス問題の背景や構造を検討します。次に「なぜ大阪にホームレスが多いのか」という問題設定を逆手にとって、②「大阪にホームレスが多いということは、どういうことなのか」を考えてみます。そして、最後に③福祉や保健医療との関わりで若干の政策的含みを示すことにしたいと思います。

多い大阪のホームレス数

昨年03年に実施された「ホームレス全国実態調査」（以下、「全国調査」）によると、日本全国で約2万5千人のホームレスが確認されました。

都道府県別に見ると、最も多いのは大阪府（7,757人）で、全体の約3割を占めています。これは東京都（6,361人）を凌ぎ、神奈川県（1,928人）や愛知県（2,121人）よりも格段に多い数です。

日本のホームレスの多くは、大都市に分布していますが、必ずしも都市の人口規模に比例しているわけではありません。日本のホームレス問題は、単に都市問題というだけでなく、それぞれの都市や地域の持っている構造や特質が作用していると

考えることができると思います。

大阪の雇用・失業問題と ホームレス問題

さて「なぜ大阪にホームレスが多いのか」という問題を考える際に、仕事や住宅、家族、福祉制度などの視点から、多様なアプローチがありえますが、ここではさしあたり大阪が抱える雇用・失業問題との関わりから、大阪のホームレス問題に迫ってみたいと思います。

近年、各地で実施された実態調査や「全国調査」の結果をみると、ホームレスに至る主な要因として「雇用・失業問題」が横たわっていることが判ります。

大阪府で2001年に実施された実態調査をみても（『大阪府野宿生活者実態調査報告書』大阪府立大学社会福祉学部都市福祉研究会、2002年3月。調査対象地域は大阪市を除く大阪府内全域。以下「大阪府調査」）、ホームレスに至るまでの雇用形態が臨時や日雇などのように不安定であったり、リストラや倒産などによる失業がホームレスになる引き金となったという回答が多くみられます。

雇用・失業情勢を表す指標の一つに完全失業率がありますが、これを都道府県別にみると（『平成14年就業構造基本調査』）、全国平均5.4%に対して、大阪府では8.6%と沖縄県の9.3%に次いで高く、東京都の5.9%よりも格段に高くなっています。大阪は、他の都道府県に比べて完全失業率が高いことが判ります。

また、雇用・失業情勢を把握する際には、完全失業率のみでなく、臨時や日雇などの不安定な雇用形態を視野に入れることが必要です。「大阪府調査」の結果をみても、ホームレスに至る過程では幅広い業種・職種において、雇用形態が不安定化するという傾向が明らかとなっています。そして不安定な雇用形態で仕事に就いていた方ほど、倒産や解雇などの理由で失業に至った割合が高くなっています。

さらに、雇用・失業問題との関わりで、大阪のホームレス問題をみる際に無視できないのが、全国最大の日雇労働市場である「釜ヶ崎（あいりん地区）」の存在でしょう。“日々雇用・日々失業”と形容されるように、日雇労働という雇用形態は常に失業と隣り合わせの不安定な生活を伴っています。本特集で海老一郎氏が述べているように、雇用対策や社会保障行政の不十分さもあいまって、大阪の中高年日雇労働者の抱える失業問題は、ホームレス問題と直結しがちであるというのが現状です。

以上のようにみると、大阪のホームレス問題には、雇用・失業問題が大きく作用していることが判ります。

大阪のホームレスは どこから来たのか

次に示しておきたいのが、「大阪のホームレスはどこから来たのか」という点です。この点は、いま大阪にいるホームレスへの対応策を議論する際にも重要なポイントとなります。

「大阪府調査」の結果からホームレスの出身地を見ると、近畿が3割強、九州・沖縄が3割弱、中国・四国がそれぞれ1割前後となっています。彼らの多くは、1960～70年代に仕事を求めて大阪に来ています。来阪してから20年以上経ってホームレスになった方と大阪府出身者を合わせると、全体の約7割に達します。

また、大阪市を除く大阪府内に分布するホームレスは、釜ヶ崎を抱える大阪市内から流れてきたのではないかという意見を、よく耳にします。しかし、「大阪府調査」でホームレスに至る直前の仕事をみると、大阪市を除く大阪府内のホームレスのうち半数以上は、同じく大阪市を除く大阪府内で働いていた方々です。

要するに、大阪のホームレスの典型は、まさに“地元発生型”というべきもので、ホームレスに至る前はその地域に労働・生活の基盤をもってい

たわけです。大阪のホームレス問題は、具体的には大阪府内の市町村の経済や雇用・失業の情勢と深く関わっているといえます。

大阪にホームレスが多い ということは、どういうことか

「なぜ大阪にホームレスが多いのか」という問題を明らかにするためには、さらに踏み込んだ検討が必要ですが、ひとまず切り口を変えて「大阪にホームレスが多い」という事実から言えること、考えられることをいくつか示しておきたいと思えます。

「ホームレス観」

まず触れておきたいのが、ホームレスに対する見方、つまり「ホームレス観」についてです。

時に、ホームレスは“癒け者”であるとか「好きでやっている」などという、まことしやかに語られる意見を耳にします。しかし、そういう“癒け者”が、1990年代に大都市を中心に急増し、そのうち多くが大阪に分布し、しかも大半が中高年男性であるというのは、説明をつけることができませんし、第一不自然です。

果たして、ホームレスが実際に“癒け者”なのか、あるいは“癒け者”と見なしているのか、その違いは非常に大きいと思います。特に、施策を打ち出す政府・自治体のなかで、または福祉や保健医療の従事者のなかで「イメージ先行型のホームレス観」が強いと、施策やサービスの内容や方向にも大きな影響を与えかねません。

地域住民とホームレス

「大阪にホームレスが多い」ことで、大阪では地域住民とホームレスとの軋轢も数多く生じています。そこで、地域住民にとってのホームレス問題について考えてみたいと思います。

5年前に大阪市で実施された市民意識調査（『野宿生活者【ホームレス】に関する総合的調査研究報告書』

大阪市立大学都市環境問題研究会、2001年1月）の結果を見ると、街中や公園、駅などでホームレスが寝泊まりしていることによって「道路や施設・通路の使い勝手が悪い」、あるいは「危険を感じる」という意見が多く寄せられています。

地域住民にとってのホームレス問題は、まさにその地域の住みよさ・住みにくさと関わっているようです。

しかしここで、問題の構図を「＜ホームレス＞対＜地域住民＞」として対立的に描くのは妥当ではありません。このような対立的な構図や、ホームレスに対する敵視、差別視には、先ほど述べたような「偏見的なホームレス観」が深く関係しているように思われます。何よりこの問題構図の問題点は、ホームレス対策・支援の主体が登場していないことです。なかでも政府・自治体の役割を抜きにして、ホームレス問題の解決はありえません。

ホームレスを「じゃま者」扱いして、とにかく目の前から排除するというのではなく、ここで重要なのは、ホームレスが生み出される背景と対策のあり方に目を向けて「ホームレス問題」の何が問題なのかを把握することだと思います。その際に着目したいのが、次に述べるように、ホームレスと政策・行政との関わりです。

まとめにかえて ——若干の政策的含み——

「なぜ大阪にホームレスが多いのか」という問題は、言い換えれば、社会保障や社会福祉というセーフティネットがありながら「なぜ大阪でホームレスがここまで多くなったのか」という問題だと思います。

政府や自治体のセーフティネットが脆いのか、それとも最早セーフティネットだけでは抱えきれない問題なのか、これは二者択一ではなくて両者について検討する必要があると思います。

第一に、何よりもいま存在するホームレスに対

して、特に福祉・保健医療の面で緊急的に対応することが求められます。そして、ホームレスからの脱却（自立支援）に結び付けていく必要があります。

満足の食事・栄養をとることができず、肉体的に深刻な状態におかれているホームレスも少なくないことが、調査結果から明らかとなっています。また、衛生状態も概してよくありません。さらに、周囲からの敵視やいたずらによって精神的に不衛生であったり、社会的に孤立した状態におかれているホームレスも多く存在しています。今ここにある問題に対処するという点で、まさに福祉や保健医療の出番だと思えます。

第二に、ホームレスに対する福祉と保健医療の保障にあたって重視したいのは、“セーフティネットの最後の砦”として位置づけられる生活保護制度とそのあり方です。

生活保護行政は各自治体にある程度の裁量が与えられており、対応には地域差があるようです。住所がないという理由で生活保護を支給しないと

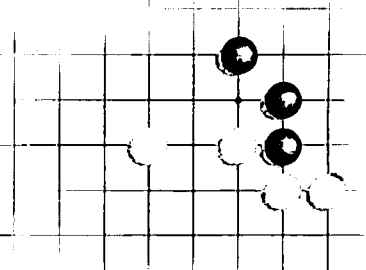
いった違法運用はぜひ見直されるべきです。また稼働能力を有する方に対しても、生活保護法の理念と条文に則した運用が求められます。

第三に、「大阪のホームレスをこれ以上増やさない」という視点から、ホームレス予備軍を視野に入れた施策も求められるでしょう。

冒頭で、「ホームレス」と「野宿生活者」の違いを述べましたが、欧米のように「ホームレス」を広く不安定な居住状態としてとらえると、野宿状態を未然に防ぐ予防の観点が浮かび上がります。野宿状態に陥る前段階で、失業や住宅、医療・福祉などの関連制度による歯止めを十分に機能させることが必要だと思えます。それらの制度・施策が適切に対応することで、失業や貧困によって野宿状態に陥る蛇口を引き締めることができるのではないのでしょうか。そして、ホームレス問題のありようや地域の姿、大阪の住みよさの度合いも変わってくるのではないのでしょうか。

「初段(5段)をめざす囲碁クラブ」 へのお誘い

当 クラブは、1990年の第12回保険医囲碁大会の懇親会の席上、当時2級の会員からの「大会のすそ野を広げるためにも、級位者が集まり、プロ棋士の懇切丁寧な指導を仰いで棋力向上と相互親睦を図るクラブをつくろう」との提起をきっかけに誕生しました。現在は、関西棋院の滝口政季八段に、指導基や会員同士の対局の講評「アマ碁」手直し講座」などをお願いしています。



- 1 当クラブでは、特に指導基の「並べ直し」を時間をかけて丁寧におこなっています。他人の並べ直しを横で聞くのも、実に有益です。
- 3 会員の対局を素材にした、滝口プロによる「アマ碁」手直し講座」を始まりました。この手はなぜ悪手なのか、どう打てば良かったかを、大盤解説してもらいます。

- 2 滝口プロに指導基の「棋譜」もつけてもらっていますから、後日改めて検討することができます。
- 4 当初級位者だった会員は全員有段者に昇段しましたので、別名「5段をめざす囲碁クラブ」でもありますが、級の先生方のご参加を心からお待ちしています。

例会は毎月第2土曜日の午後2時～6時半。会費は1万円。

詳細は、担当事務局の田村（電話06-568-7721、E-mail/tamra@doc-net.or.jp）までお問い合わせ下さい。